

# 私の一冊

看護学科 近藤美保 先生

ミヒヤエル・エンデ作 『モモ』

小鹿図書館 : 908/I 95/127 (岩波少年文庫) ほか

私の一冊の執筆依頼がきて、本当に困り悩んだ。しばらく、読書とは無縁の生活をしてきたからだ。締め切り直前になり(でも当初の期限はとっくに過ぎている・・御迷惑をおかけしてごめんなさい)、いつか読んでみようと思っていた本を図書館で探し読んでみることにした。それがこの『モモ』だ。本を読む時間があったら～を片付けたい・・と日々のできごとに追われていた私にいつものメッセージがこの本から届いた。有名な本なので読んだ方もきっと多いと思うが、読書習慣から遠ざかっていた私にとって自分を振り返る機会となり貴重な一冊の本となった。

私は以前、児童思春期病棟(精神科)で看護師として働いていたことがある。そのときに受け持ちだった患児の女の子に「モモみたい」と笑顔で言われて意味がわからなかった。『モモ』という本の存在は何となく知っていたが読んだことはなく、その後、何となく、その言葉が気になりながらももう十年近く経過してしまった。本を手にしてみると小学校5, 6年生以上から読める本と書かれているが分厚く、どうしよう読めるだろうか、躊躇してしまった。しかし期限も迫っていたので読むことにした。パラパラとめくるだけでもよいのでストーリーについては読んでみてほしい。ファンタジーの世界をイメージしながらじっくりと読むのもよし、自分にとって響く言葉を見つけ読むのもよしだと思う。私は後者だった。

私に『モモ』みたいと言ってくれた彼女が何を思ってそう言ったのかは、聞いてみないとわからないが、精神科の看護師としての私をみて言ってくれたとしたら、こういうことだったのかなということが漠然とわかった。『モモ』にできたことは、相手の話を聞くこと、聴くこと。『モモ』は注意深く聞くだけ、話を聞いてもらっている人は急に自分の意志がはっきりとしてくるという。でも、今の私にはそれができているのだろうか。相談にのっているつもりで、何かいいアドバイスをしなくてはとってしまうのは結局、相手の話を聴いていないのかもしれない。難しいけれど相手が自分で答えをだせるように引き出すのが、聴くことの1つだと改めて感じた。

登場人物たちのように、時間を節約していろいろなことを早く片付けようとする中で、さらに心のゆとりを失い、常にせかせかとした状態を自分で作っていることに気づいた。本の世界の子どもたちは、小さな時間貯蓄家のようになり、やれと命じられたことを、いやいやながらおもしろくなさそうに、ふくれつつらでやり、自分たちの好きなようにしていいと言われると今度は何を

したらいいのか全然わからない状態になってしまう。今の自分はどうか。また、いつも焦り、目の前にある幸せに気づかず人生が終わってしまうのではもったいないことではないか。私ごとだが、朝、「オイチイ〜(おいしい)」と、ゆっくり時間をかけて朝食を食べてくれる子どもにも、忙しいときにかまってオーラとジットーとした視線を浴びせてくる犬にも、なるべく温かい心と笑顔で接してみようと思う(できるかな?)。読書とは不思議だ。本を読み知識を得るだけではなく、自分の生きざまに反映させていく栄養とすることができるから。

最後に、私が今回この本のなかから、自分への気づきとして何度も読み返した部分をまとめておきたい。カシオペイアという、亀が登場する。甲羅に、ほんのり文字を浮かびあがらせて導いてくれる。私もこんな亀がほしい。でも、こんな亀はいないけれど、学生にとって私はそんな亀のような存在になれるように努力したいと思う。モモが急いで移動しなければならないときにカシオペイアを抱いて移動したほうが早いことを伝えるけれどカシオペイアは「ミチハ ワタシノナカニアリマス」と答え動きだした。また、モモがカシオペイアに「もうちょっとはやく歩けない？」と尋ねると「オソイホド ハヤイ」そう答えさらにのろのろと這うと、そのほうがかえって早く進めることにモモが気づいた場面。皆さんにとって、今の自分に必要なメッセージが見つかる1冊だと思いますので、時間がなくて読書なんて無理！というときにこそどうぞ、読んでみてくださいね。